

# 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面及び個人的要因の影響

河内 清彦\*

本研究では障害者に関する健常学生の抵抗感を軽減させるための手がかりを得るため、健常学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面, 個人的要因(障害者への関心度, 性別, 援助経験)の影響を検討した。4障害(視覚, 聴覚, 運動, 健康)条件に対応した4下位尺度(関係, 主張, 教育, 当惑)により658名の大学生に質問紙調査を実施した。因子分析の結果では, 特定の対人場面を表す下位尺度に関し, 4障害条件が共通の因子負荷量を示す「当惑関係」「自己主張」「統合教育」という3因子が抽出された。このことから, 健常学生の意識に及ぼす影響は, 障害条件よりも尺度内容に依存していることが明らかとなった。これら3因子と個人的要因との関連では, 「当惑関係」因子は3要因と, 「自己主張」因子は性別と関連が認められたが, 「統合教育」因子はどの要因とも関連が認められなかった。一方, 下位尺度別障害条件と個人的要因との比較では, 視覚と聴覚の障害条件よりは, 運動と健康の障害条件の方が抵抗感が弱く, 性別の影響は下位尺度により異なっていたが, 関心度と援助経験は障害者と交流しようという積極的な意識を助長することが明らかとなった。

キーワード: 健常大学生, 自己効力感, 障害者観, 障害条件, 個人的要因

## 問 題

大学は, 障害者にとって健常者以上に, 就職など将来への可能性を拡大してくれる重要な所である (Fichten, 1988; 谷合, 1995)。それにもかかわらず, 大学側の障害者を受け入れる体制は十分とは言えなかった。それが, ノーマライゼーションやインクルージョンの理念が広まるにつれ, わが国の大学でも障害学生の学習環境に対する関心が高まってきた (学生ボランティア活動についての調査プロジェクトチーム, 1997; 障害学生の高等教育国際会議実行委員会, 1997; 全国障害学生支援センター, 2002)。しかし, 施設・設備などハード面の充実だけでは障害学生にとって十分とは言えず, 2001年に国立大学協会は, 健常学生による障害学生のための支援システム構築の必要性を提言した (国立大学協会第3常置委員会, 2001)。

しかし, わが国ではボランティア活動などへの参加者は15%と少なく (内閣府政府広報室, 2002), この提言でも障害学生を支援しているのは学生の一部に限られているとしている。これは健常学生の障害学生に対する意識が抵抗感の強い, 消極的なものであるためと推察される (河内, 1990a, 1990b, 2001, 2002, 2003)。従って, 上

記のような支援システムを作るには, まず障害学生に対する健常学生の抵抗感を軽減させる方策を立てることが肝要であろう。

ところが, 障害学生との関係を問題にする場合, 彼らの有する障害条件は多種多様であり, 支援ニーズも障害条件によって異なる場合が多いことを考慮しなければならない。しかし障害内容を具体的に区別できる健常学生は少ないように思われる。むしろ, 障害条件相互に共通する課題も多いため, 大多数の者は「障害者」という漠然としたイメージを意識することが多いと推察される (河内, 2001)。それ故, 障害学生に対する健常学生の抵抗感を軽減させる方策を立てるためには, 個々の障害条件を区別する特有の意識 (以下, 障害の「特異性」という) と同時に, 個々の障害条件相互に共通の意識 (以下, 障害の「共通性」という) とを考慮することが必要であろう。

それでは, 大学生を含む成人が実際に障害条件をどのように認識しているのであろうか。例えば, 態度構造研究をみると, 健康・運動障害, 感覚障害, 知的・精神障害などは独立した因子が区別されており (Abroms & Koderer, 1979; Garvar & Schmelkin, 1989; 中司, 1988), 障害の「特異性」が示唆される。また, 障害条件に関する好意の程度はほぼ前述の順序で有意差が認められており, ここでも障害の「特異性」が推察される (Abroms & Koderer, 1979; Harasymiw, Horne, & Lewis,

\* 筑波大学大学院人間総合科学研究科 (心身障害学系)  
〒305-8572 つくば市天王台1-1-1 筑波大学心身障害学系  
電話 029-853-6803  
kawauchi@human.tsukuba.ac.jp

1976 ; 忍, 1967 ; Thomas, 2000 ; Westbrook, Legge, & Pennay, 1993)。さらに、障害者に関する好意度の違いは、障害が他者の目に付くか、付かないかという外見的な側面、すなわち可視性についても報告されている (例えば, Cloerkes, 1979 ; Schmelkin, 1984 ; Westbrook, Adamson, & Westbrook, 1988)。

このように、障害の「特異性」が示唆される一方で、障害条件の影響には有意な差異は無いとする障害の「共通性」も報告されている。例えば、Gething (1991) は、刺激人物の有する障害条件だけを交換した並行尺度 (「障害者との交流尺度 (IDP)」) への回答を12の障害条件で比較し、全体的には有意差が認められないことから、障害の「共通性」を指摘している。また並行尺度を用いて、視覚障害学生及び聴覚障害学生との交流に対する健常学生の自己効力感を調査した研究でも尺度得点に有意差は認められていない (河内, 2003)。これらの結果は、個々の障害条件を通してみられる障害条件の直接の影響としての「共通性」までは示していないが、Jones (1974) の場合は、13障害条件 (非障害を含む) を有する刺激人物に対する社会的距離を測定し、全ての障害条件と関連する一般因子を見出している。

以上、意識に及ぼす障害条件の影響には障害の「特異性」と「共通性」の特徴が認められる。しかし、先行研究ではいずれの場合も障害条件が複数になっているだけで、使用する測度は一次元性を仮定した単一の尺度だけである。

ところが、障害者に対する意識構造はわが国においても多次元であることが報告されており (例えば, 河内, 1990a, 1990b ; 河内・四日市, 1998)、従来の方法では障害の「共通性」の影響が意識の下位次元間を越えて及ぶかを明らかにすることはできない。

この課題を解決するためには、意識の下位次元、あるいは異なる側面を測定できる尺度を複数用意し、各尺度が複数の障害条件に対応できる汎用型の尺度になっていることが不可欠である。ただし、この手続きによって意識構造に及ぼす障害の2側面 (すなわち、「共通性」と「特異性」) の相対的關係が明らかになったとしても、それだけでは意識を改善する方策を立てることはできない。方策を立てるためには、解明された意識構造と意識を改善するのに役立つ個人的要因との関連についても解明しておかなければならない。

ところで、障害者への好意的意識と関連する個人的要因として性別の要因があるが、女子学生の場合は大学で障害者を支援することに寛容なだけでなく (Gannon & MacLean, 1995, 1996)、障害者との表面的な交流に

関しては自己効力感の強いことが報告されている (河内, 1999, 2003 ; 河内・四日市, 1998)。また、障害者への関心度についても、関心度の強い者は障害者に関する態度や自己効力感が好意的あるいは積極的であることが見出されており (河内, 1990a, 1990b ; 河内・四日市, 1998) 障害者と交流することへの認知的・感情的反応には関心度の影響が推察される。さらに、ボランティア活動などの援助行動についても、参加することと障害者に関する態度や自己効力感とは関連のあることが報告されている (黄・大野, 1989 ; 河内, 1999, 2003)。

そこで、本研究では(1)異なる対人場面に対する健常学生の意識に及ぼす異なる障害条件の影響を相対的に探求し、健常学生の意識構造に及ぶ障害の「共通性」と「特異性」の影響範囲を解明するとともに、(2)障害学生との交流に関する意識の下位次元と障害者への関心度、性別、援助経験との多次元の関連性を考察し、意識を規定している個人的要因を決定することを主たる目的とした。

## 方 法

### 1. 調査参加者と実施手続き

本調査は、I県にある国立大学で2001年12月から2003年9月の間に開かれた障害学入門に関する5つの講義の1回目の受講者で、自主的に調査に参加した658名の学生 (男子240名, 女子418名) を対象に、授業時間の一部を用いて集合調査を実施した。なお、平均年齢は20歳3ヶ月 (標準偏差は1歳11ヶ月) であった。また、2回以上調査に参加した者については、1回目の回答結果だけを本分析に用いた。

### 2. 調査内容

(1) **自己効力感尺度と障害者観尺度** 障害者との交流に関する意識を測定する尺度としてわが国では主に障害者観尺度が用いられてきた。しかし障害者観尺度への回答は実際の行動よりも肯定的傾向が強く (Fichten, 1988)、実際の行動を把握するには自己効力感尺度の方が適しているとされている (Fichten & Bourdon, 1986 ; 河内, 2002, 2003)。そこで、本研究では障害者観尺度に加え、自己効力感尺度を用いた。

ところで、さまざまな障害条件に適用できる自己効力感尺度としてわが国で使用可能な尺度は、河内(2003)による、「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度 (以下「効力感尺度」とする)」だけである。この尺度は自己効力感のレベルの違いを示す2つの下位尺度、すなわち、障害学生との交流に関し建前的な意識を表す「交友関係」(以下「関係」という) 尺度と、本音の意見を示す「自

己主張」(以下「主張」という)尺度からなり、下位尺度の刺激人物の障害条件は交換可能であるため、これらの尺度を本研究の『効力感尺度』の下位尺度として採用した(TABLE 1 参照)。なお、評定尺度は、交流場面で課題を遂行するのに「非常に抵抗がある」(1点)から、「全く抵抗がない」(7点)で示す、7件法とした。

一方、わが国で作成された既存の障害者観尺度の中で、複数の障害条件に対応でき、特定の対人場面に焦点を当てた汎用型の尺度は、河内(2003)による「統合教育」(以下「教育」という)尺度と、「交流の場での当惑」(以下「当惑」という)尺度しかないように思われる。これらの尺度は、「視覚障害者(児)に対する多面的態度尺度」(河内, 1990a)を構成する5つの下位尺度の中から、対人関係に関する意識を測定するのに適しているとして選ばれたものである。また内容的には障害者との関係が回答者にとって間接的か・直接的かという関係性の違いも示せることから、これらの尺度を本研究の『障害者観尺度』の下位尺度として採用した(TABLE 2 参照)。なお、各項目の評定尺度は、「全く同意できる」(1点)から「全く同意できない」(6点)の6件法とした。

(2) 障害者への関心項目 異なる障害を有する者に対する関心の程度を評価するため、次の1項目評定尺度を用いた。「社会には身体にさまざまな障害を持った方がいらっしゃいますが、あなたは次のような障害を

有する方々に対しどのくらい関心をお持ちかを教えてください。」評定尺度としては、「非常に関心がある」(1点)から「全く関心がない」(6点)の6件法とした。

(3) 障害条件 わが国の『効力感尺度』の障害条件については視覚障害と聴覚障害だけに焦点が当てられてきた(河内, 1999, 2002, 2003; 河内・四日市, 1998)。これらはいずれも感覚障害であり、様々な身体障害条件間の相対的影響を検討するためには、身体機能の障害にも焦点を当てる必要がある。そこで、本研究でも Fichten, Bourdon, Amsel, & Fox (1987) が調査している運動障害(車椅子使用)を障害条件に加えた。これらは主として可視的障害である。このため、先行研究(例えば, Cloerkes, 1979; Schmelkin, 1984; Westbrook et al., 1988)で指摘されている障害条件の可視性の影響を検討するため、本研究では健康障害を加え、4障害条件とした。障害条件ごとの印象を統制するため、「視覚障害者」は、目が全く見えないために、歩く時は白杖を、文字の読み書きには点字を使う必要がある人、「聴覚障害者」は、耳が聞こえず、音声でのコミュニケーションが取りにくい人、主に手話や筆談を使う人、「運動障害者」は、手で字を書いたり話したりすることは全く不自由でないが、両足が完全にマヒして歩けないため移動には車椅子を用いる人、「健康障害者」は心臓や腎臓など内臓に疾患があるため激しい運動や持久力を必要とする作業をすることが困難な人とした。

TABLE 1 自己効力感尺度の項目内容

番号	項目内容
[交友関係(関係)尺度]	
1	レストランへはどう行けばよいかを◆の学生と話し合う場合
2	学内での会合に同行してほしいと◆の学生から頼まれた場合
3	◆の学生ではできない調べ物を図書館に行ってくれと頼まれた場合
4	◆の学生とレストランで食事をする場合
6	講義が始まる前に◆の学生から教室へ一緒に行こうと誘われた場合
9	寮でのパーティーに◆の学生を誘う場合
10	喫茶店でコーヒーを一緒に飲まないかと◆の学生を誘う場合
11	◆の学生に引き合わされた場合
13	◆の学生に話しかけようとする場合
[自己主張(主張)尺度]	
5	◆の学生が自分でできると思われるので手伝いを断る場合
7	◆の学生との見解が完全に対立した場合
8	◆の学生に1000円貸してくれるよう頼む場合
12	忙しいため◆の学生の手伝いを断る場合
14	自分が必要なので授業のノートを◆の学生に貸すのを断る場合
15	二人である共同課題の内容を公平に分担しようと◆の学生に話す場合
16	図書館で◆の学生がうるさくするので静かにするよう注意する場合
17	先月貸した1000円を◆の学生に催促する場合
18	◆の学生に頼み事をする場合

注) ◆には4障害条件の各々が入る

TABLE 2 障害者観尺度の項目内容

番号	項目内容
[統合教育(教育)尺度]	
1	◆の子どもは、盲(聾、養護)学校よりも普通学校の方が個性を伸ばすことができる
5	◆の子どもは、普通学校に入った方が、多くの経験をすることができる
9	◆の子どもは、通常の学級でも十分教育することができる
13	◆の子どもを普通学校に入れるとお互いの理解が深まる
17	◆の子どもは、普通学校の中で十分に活動できる
3	*◆の子どもは、盲(聾、養護)学校で教育するのが一番よい
11	*◆の子どもは、無理して普通学校へ入れる必要はない
15	*◆の子どもは、通常の学級ではその子どもにあった授業はできない
[交流の場での当惑(当惑)尺度]	
4	◆の人に対し遠慮がある
6	◆の人に手を貸すことには躊躇してしまう
8	◆の人とつきあうにはひどく気がつかう
10	◆の人と自分とは違う世界の人のように感じる
12	◆の人とはコミュニケーションがとりにくい
14	◆の人とは、どのような話をしたらよいかわからない
16	◆の人にもものを尋ねるのは、ためらいがある
18	◆の人には気軽に声がかけられない

注) 項目内容の◆には4障害条件の各々が入る。\*の付いた項目は評定尺度が逆。

一方、『障害者観尺度』と『障害者への関心項目』の刺激人物の障害条件についても『効力感尺度』との対応を考慮し、上記の4障害条件とした。なお、『効力感尺度』では、障害を有する同性の大学生を刺激人物に用いているため、わが国の高等教育ではなじみの薄い知的障害と学習障害及び健常学生の認知度が低い言語障害については、本研究から除いた。

(4) 援助経験の有無 支援活動を行うには意図的な意識が重要と考え、本研究では援助経験の中で意図的なものと見なすことのできるボランティア活動を対象とし、これまでに行った時期によって、調査参加者を次の3群に分類した。すなわち、「過去にしたことがあるが、今はしていない」(過去経験, 292名)、「現在している」(現在経験, 121名)、「これまで一度もしたことがない」(未経験, 245名)。

## 結 果

### 1. 尺度の妥当性と信頼性の検討

(1) 『効力感尺度』及び『障害者観尺度』 刺激人物の障害条件が異なっても、『効力感尺度』及び『障害者観尺度』の項目が既存の下位尺度と一致するかを確認するため、両尺度項目(それぞれ18項目)に4障害条件別の主因子法因子分析を適用した。両尺度とも固有値1以上の因子は2個だけであった。これら2因子にバリマックス法による回転を行ったところ、『効力感尺度』項目は全ての障害条件で既存の下位尺度と一致した。そこで、これら18項目を採用した(TABLE 1)。これに対

し、『障害者観尺度』では両因子にほぼ同等の因子負荷量を示す項目が2個複数の障害条件で見出されたため、これら2項目を除き、残り16項目で同様の分析を行った。その結果、全障害条件で全ての項目が既存の下位尺度と一致したため、これら16項目を採用した(TABLE 2)。なお、全ての下位尺度のCronbachの $\alpha$ 信頼性係数と $\theta$ 信頼性係数は.80以上で、また全項目の主成分負荷量は.40以上で、第I主成分寄与率も全て40%を超えていた。全てが満足すべき値であったため、本分析では項目得点の総和を尺度得点とした。

(2) 関心度得点 4障害条件相互に『障害者への関心項目』によるスピアマンの順位相関係数を求めたが、全ての値が.48以上で、相互関連が認められた。そこで、『障害者への関心項目』に主成分分析を適用し、主成分得点を関心度得点とし、その大小によって、調査参加者を「関心あり強」(165名)、「関心あり弱」(165名)、「関心なし弱」(165名)、「関心なし強」(163名)の4群に分割した。なお、主成分負荷量の値は健康障害の.75以外は全て.83以上であった。

### 2. 障害条件、対人場面及び個人的要因に関する相対的検討

(1) 健常学生の意識に及ぼす対人場面と障害条件の影響 本研究で採用した4つの対人場面(関係, 主張, 教育, 当惑)×4障害条件(視覚, 聴覚, 運動, 健康)に関する16尺度による相互相関行列に主因子法因子分析を適用した。抽出された固有値1以上の3因子にバリマックス法及びコバリミン法による回転を行ったが、斜交因子間の

相関係数が低かったため、バリマックス法による結果をTABLE 3に示した。表中の因子負荷量の絶対値が.600以上の基準を満たす尺度を因子を代表する尺度とすると、第I因子では、「関係」尺度の健康障害以外の3障害条件と「当惑」尺度の4障害条件全てがこの基準を満たした。そこで、第I因子を「当惑関係」と名付けた。第II因子で基準に当てはまるのは、「主張」尺度の4障害条件だけであるため、この因子を「自己主張」とした。第III因子では、「教育」尺度の4障害条件だけが基準を満たしているため、第III因子を「統合教育」と命名した。なお、3因子とも4障害条件に共通する因子であるため、以下では「共通因子」とする。

(2) 共通因子と個人的要因との関連 TABLE 3にある3つの共通因子と個人的要因との関連性を検討するため、共通因子の因子得点を基準変数に、また関心度、性別、援助経験の3要因を説明変数にした数量化理論I類の結果をTABLE 4に示した。各変数の規定力は、表中の偏相関係数の値(.14以上)により評価した。その結果、「当惑関係」因子は、3要因全てで、また「自己主張」因子は性別の要因で関連が認められたが、「統合教育」因子はどの要因とも関連が認められなかった。

次に、カテゴリー数量の大きさと正負の符号に基づいて、関連の認められた共通因子と個人的要因との関

TABLE 3 バリマックス法による回転後の因子負荷量

(尺度名)	共通因子		
	当惑関係	自己主張	統合教育
(関係)			
視覚	0.779	0.240	-0.067
聴覚	0.668	0.268	0.038
運動	0.678	0.330	-0.165
健康	0.419	0.305	-0.091
(主張)			
視覚	0.286	0.815	0.032
聴覚	0.316	0.843	0.017
運動	0.191	0.877	-0.093
健康	0.176	0.838	-0.079
(教育)			
視覚	-0.089	-0.017	0.730
聴覚	-0.138	0.019	0.718
運動	-0.115	-0.063	0.778
健康	-0.062	-0.055	0.711
(当惑)			
視覚	0.780	0.121	-0.049
聴覚	0.753	0.084	-0.052
運動	0.754	0.141	-0.244
健康	0.601	0.164	-0.272
固有値	4.083	3.251	2.356

TABLE 4 3つの共通因子得点に対する数量化I類によるカテゴリー数量

要因 カテゴリ	当惑関係	自己主張	統合教育
関心度	(.326)	(.127)	(.078)
なし強	-0.390	0.197	0.097
なし弱	-0.177	0.012	0.035
あり弱	0.173	-0.088	-0.100
あり強	0.399	-0.122	-0.032
性別	(.172)	(.140)	(.039)
男子	-0.200	0.180	-0.048
女子	0.115	-0.103	0.028
援助経験	(.187)	(.026)	(.031)
過去経験	0.015	0.018	-0.021
現在経験	0.306	-0.049	0.058
未経験	-0.170	0.003	-0.004
重相関係数	0.462	0.216	0.086

注) ( )内は偏相関係数を示す

係を見ると、「当惑関係」因子では関心のある群と女子が、また「自己主張」因子では男子が因子得点を高める(プラス)の方向に寄与しており、これらの因子は男女で正反対の関係を示した。一方、「当惑関係」因子と援助経験の要因とでは経験のある群が因子得点を高める方向に寄与しており、なかでも現在経験の方が過去経験よりもその傾向が強かった。

### 3. 特定の対人場面における障害条件と個人的要因との関連

特定の対人場面(下位尺度)における健常学生の回答に及ぼす障害条件と個人的要因との影響を検討するため、各下位尺度別に障害条件×個人的要因ごとの平均値を求めて示したのがTABLE 5である。なお、「教育」尺度以外の3尺度得点の値は抵抗感の強度を示しているが、抵抗感の強いのは尺度得点の低い方であり、また、「教育」尺度では、統合教育に賛成している方が尺度得点が低くなっている。従って、抵抗感が低くなれば、尺度得点の平均値は増加することになる。

各カテゴリーの人数が不揃いであるため、調和平均を求めた上で、下位尺度別に障害条件×個人的要因による混合型二元配置分散分析を行った(田中・山際, 1992)。自由度は、障害条件が3、関心度が3、性別が1、援助経験が2で、有意な場合はLSDによる多重比較を行った。なお、紙面の都合から「関係」尺度と類似傾向にある「当惑」尺度の結果はここでは省いた。

(1) 障害条件×関心度 交互作用が有意でなかったのは「主張」尺度だけで、障害条件の主効果だけが有意で( $F=78.3, p<.01$ ), 抵抗感の強度は「運動」=「健康」<「視覚」=「聴覚」であった。他方、交互作用が有意な

「関係」尺度 ( $F=4.0, p<.01$ ) の4カテゴリーの  $F$  値を関心度の弱い順に示すと, 26.1, 24.4, 25.4, 16.8で, 全て1%水準で有意であった。このうち, 「関心なし強」と「関心なし弱」のカテゴリーでは, 「健康」<「運動」<「視覚」<「聴覚」の順に抵抗感が強くなっていたが, 「関心あり弱」のカテゴリーでは「聴覚」以外の3障害相互には抵抗感に有意差は認められず, また「関心あり強」のカテゴリーでは「運動」<「視覚」<「健康」と関心がないとするカテゴリーとは順序が逆転していた。一方, 障害条件別では「視覚」( $F=26.0, p<.01$ ), 「聴覚」( $F=11.2, p<.01$ ), 「運動」( $F=17.9, p<.01$ ) の3障害条件に有意差が認められ, 抵抗感の強度は「関心あり強」<「関心あり弱」<「関心なし弱」<「関心なし強」という順序傾向が示された。また, 「教育」尺度も交互作用は有意であったが( $F=3.3, p<.01$ ), 関心度の弱いカテゴリーの順に  $F$  値を示すと, 123.4, 77.4, 88.2, 71.9で, 全て1%水準で有意であった。このうち, 「関心なし強」と「関心なし弱」のカテゴリーでは賛成度は「視覚」=「聴覚」<「運動」=「健康」であったが, 「関心あり弱」と「関心あり強」のカテゴリーでは, 「健康」<「運動」と有意差が認められた。一方, 障害条件別では, 「視覚」( $F=3.3, p<.05$ ), 「聴覚」( $F=3.6, p<.05$ ) だけが有意で, いずれも「関心あり」のカテゴリーが「関心なし」のカテゴリーよりも賛成度が有意に強かった。

(2) 障害条件×性別 交互作用が有意でない「関係」尺度と「教育」尺度で, 性別の主効果が有意なのは「関係」尺度( $F=25.0, p<.01$ )だけで, 抵抗感の強度は女子<男子であった。障害条件の主効果は「関係」尺度( $F=78.2, p<.01$ )及び「教育」尺度( $F=327.9, p<.01$ )とも有意で, 前者での抵抗感は「健康」=「運動」<「視覚」<「聴覚」, 後者での賛成度は「視覚」<「聴覚」<「健康」<「運動」であった。交互作用が有意な「主張」尺度( $F=3.8, p<.05$ )の障害条件別男女差については聴覚障害以外の3障害条件に有意差が認められ, 「視覚」( $t=9.8, p<.05$ ), 「運動」( $t=10.4, p<.01$ ), 「健康」( $t=10.5, p<.01$ )で, 全て抵抗感の強度は男子<女子であった。一方, 性別では男子( $F=55.8$ )及び女子( $F=28.0$ )とも1%水準で有意であり, いずれも抵抗感の強度は「運動」=「健康」<「視覚」=「聴覚」であった。

(3) 障害条件×援助経験 3尺度とも交互作用は有意でなく, 援助経験の主効果が有意だったのは「関係」尺度( $F=11.0, p<.01$ )だけで, 抵抗感の強度は「現在経験」<「過去経験」<「未経験」であった。一方, 障害条件の主効果は全て有意であった(「関係」: $F=67.5, p<.01$ , 「主張」: $F=63.2, p<.01$ , 「教育」: $F=294.3, p<.01$ )。な

お, 抵抗感の強度(あるいは賛成度)の順序は上記の交互作用が有意でない場合と等しい。

## 考 察

### 1. 尺度の心理統計的特性について

本研究では『効力感尺度』と『障害者観尺度』の刺激人物の障害条件を, 河内(2003)が用いた2種類から4種類に増やしたが, 全ての障害条件で既存の下位尺度に対応した2因子構造が得られた。これは, 類似の質問項目に関しては障害条件にかかわらず類似の因子構造が見出されるという先行研究結果とも一致しており(河内, 2003; 河内・四日市, 1998; Siller, Ferguson, Vann, & Holland, 1967), 各下位尺度の因子的妥当性が保証されたと言える。さらに, 各尺度のCronbachの $\alpha$ 信頼性係数及び $\theta$ 信頼性係数は全て.80以上で, また第I主成分寄与率の値も全て40%を超えており, 尺度の内的一貫性が確認されたと言える。これらの結果から, 知的障害や学習障害などの障害条件がカバーされていないという限界はあるものの, 各下位尺度が種々の障害条件に適用できる汎用性の高い尺度であることが明らかとなった。従って, この尺度は身体障害の範囲内にある種々の障害条件を有する障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感を軽減させるプログラムの効果を測定するのに有効な測度になることが期待される。

### 2. 意識構造に及ぼす障害条件及び対人場面の影響について

本研究では, 健常学生の意識構造に及ぼす障害条件と対人場面との影響を相対的に検討するため, 4障害条件下での4尺度への回答に因子分析を適用した。その結果, 異なる障害条件であっても, 特定の尺度(すなわち, 対人場面)に関しては共通の回答パターンを示す「共通因子」が存在することを見出した(TABLE 3参照)。このうち, 「当惑関係」因子は「関係」尺度と「当惑」尺度の項目から成り立っているが, その項目のほとんどが交流場面での初期段階で表れる行動と関係している。このような交流場面への回答に関しては, Gordon, Minnes, & Holden (1990)も同様の結果を見出している。従って, 健常学生の意識構造に関しては, 障害条件よりも対人場面の影響の方が支配的であることが推測される。つまり, 従来指摘されてきた障害の「共通性」は, 特定の意識対象場面(意識の下次元)内で見られるものであって, 異なる意識対象場面を越えてまでは見られないことが示唆された。従って, 健常学生の抵抗感を軽減させるプログラムを作成するにあたっては, 個々の障害条件に特有の課題に焦点を当てる前

に、異なる障害条件に共通する一般的な課題を取り上げることも肝要であろう。

### 3. 共通因子と個人的要因との関連について

本研究では、特定の対人場面に関し4障害条件に共通する3つの共通因子が抽出されたため、これら共通因子と個人的要因(障害者への関心度、性別、援助経験)との関連を数量化理論I類を用いて検討した。その結果、「統合教育」因子は、他の2因子に比べ重相関係数及び偏相関係数の値が全て低かった。このうち、性別の影響が示されなかった原因としては、統合教育のような障害者観は、学生の場合時代の変化に連れて、男女差が減少するという傾向の関与が考えられる(河内, 1990a)。また、この因子は回答者との関係が直接的でないため、回答者自身の意見を反映するというよりは、むしろFichten (1988) が指摘するように、第三者的意見、特に回答者の受けた教育や社会的価値観などの影響を受けやすいことが推察されるため、援助経験のような回答者と直接関係する要因との関連が薄くなったと考えられる。これに対し、回答者との直接的な関係を示す「当惑関係」因子は、援助経験との関連が認められている。従って、援助経験の学習は、障害者との直接の交流に関する健常学生の抵抗感を軽減させるのに有効な手段となるであろう。ただし、回答者と直接関係のある「自己主張」因子では援助経験との関連が認められていないことから、接触経験の効果は、「当惑関係」因子が表しているような交流場面での初期段階に留まっていることを考慮すべきであろう。この点に関しては、「関係」尺度とボランティアイメージとの関連からも示唆されており、河内 (1999) が指摘するように、援助活動は、本音の意見が言い合えるような対等

な状態ではなく、むしろ表面的な付き合いとして健常学生には意識されているためと解釈される。また、「自己主張」因子が葛藤的關係を主として表しているのに対し、「当惑関係」因子と援助経験はどちらかというところから、両者の関係性の違いが共通因子に影響したとも解釈できる。

一方、性別との関連についても「当惑関係」因子と「自己主張」因子は寄与する方向が正反対で、前者は女子が、また後者は男子が障害学生との交流に対する抵抗感を弱める方向を示した。このような男女差は、感覚障害学生に関する先行研究結果とも一致しており(河内, 1999; 河内・四日市, 1998)、女子学生の方が表面的なキャンパス内交流を受け入れやすい傾向にあるのに対し、本音で付き合いなければならない交流場面では男子学生の方がはっきりものが言える可能性のあることが明らかとなった。

これに対し、関心度の場合は、「当惑関係」因子としか関連が認められず、寄与の方向では、関心があるとするカテゴリーの方が、関心が無いとするカテゴリーより抵抗感を弱めており、これまでの結果と一致した(河内・四日市, 1998)。ただし、カテゴリーの平均値は全て中央値の36.0以上であることから(表5参照)、関心がないとするカテゴリーに属する学生も抵抗感が強いとは言えないであろう。むしろ、関心のないとするカテゴリーに属する学生は、障害者との交流への実感が薄いために、抵抗感が弱くなったとも考えられる。このような関心度のジレンマがあるとするならば、障害者に関する関心の持たせ方に何らかの工夫が必要となるであろう。

TABLE 5 障害条件×個人的要因(関心度・性別・援助経験)の下位尺度得点の平均値

尺度名	関係				主張				教育				
	障害条件	視覚	聴覚	運動	健康	視覚	聴覚	運動	健康	視覚	聴覚	運動	健康
関心度													
なし強	42.6	40.3	44.6	46.6	38.2	38.7	42.0	42.5	29.3	28.7	23.2	23.0	
なし弱	45.1	41.8	47.0	47.6	37.0	37.0	40.5	40.2	28.3	27.8	23.2	23.6	
あり弱	48.4	43.7	49.6	48.9	36.9	37.4	40.2	39.7	27.8	27.0	22.0	23.0	
あり強	50.6	46.8	51.9	49.3	37.7	38.0	39.8	40.0	27.5	27.0	22.0	24.0	
性別													
男子	44.5	40.6	46.4	46.1	38.7	38.7	42.8	42.1	28.2	27.8	22.4	23.3	
女子	47.9	44.7	49.3	49.3	36.7	37.3	39.4	39.7	28.3	27.5	22.7	23.4	
援助経験													
過去経験	47.0	43.5	48.6	48.4	37.4	38.2	40.6	40.5	28.1	27.5	22.5	23.2	
現在経験	49.7	45.7	50.9	49.6	37.8	38.2	40.2	40.4	28.4	27.2	22.6	24.0	
未経験	44.8	41.4	46.5	47.0	37.2	37.1	40.8	40.8	28.4	28.0	22.8	23.3	

#### 4. 特定の対人場面における障害条件及び個人的要因の比較について

前項では3つの共通因子のうち個人的要因と関連のあったのは、回答者と直接関係する対人場面を表す因子であることを示した。しかしこれは、特定の対人場面における異なる障害条件に共通する因子との関連であり、特定の対人場面において個々の障害条件及び個人的要因に特有の影響が見られるかは不明である。そこで、特定の対人場面（下位尺度）に関し障害条件と個人的要因との関連に基づいて各尺度得点を比較した。

まず4障害条件に対する健常学生の回答傾向をみると、感覚障害と言われる視覚障害及び聴覚障害と身体機能に困難を示す運動障害及び健康障害とに二分することができる。このように、視覚障害と聴覚障害及び運動障害と健康障害との類似性は先行研究でも報告されている（Abroms & Kodera, 1979 ; Garvar & Schmelkin, 1989 ; 河内, 2001）。これら2群に関しては、運動障害と健康障害の群は、視覚障害と聴覚障害の群より「関係」と「主張」の尺度で抵抗感が弱く、また「教育」尺度では賛成の程度が強かった。しかし、障害条件群内では有意差の認められる場合もあり、また下位尺度によっても抵抗感の順序が異なる場合もあり、障害条件を単純にひとまとめにすることはできない。例えば交互作用が有意でない場合の障害条件の主効果をみると、「主張」尺度では両障害条件群内での有意差は認められないが、「関係」尺度では視覚障害よりも聴覚障害の方が抵抗感が強いのに対し、「教育」尺度では聴覚障害の方が賛成度が強かった。また、「教育」尺度では運動障害と健康障害との間に有意差が得られており、運動障害の方が賛成度が強かった。このような関係は、心臓病や糖尿病などの健康障害が、障害条件の中で最も受容されやすいという海外の結果とは一致していない（Abroms & Kodera, 1979 ; Harasymiw et al., 1976 ; Thomas, 2000 ; Westbrook et al., 1993）。これは健康障害に関し病名しか提示しない海外の研究に対し、本研究では内容を明記したため、健康障害の困難さを初めて知った者が過大評価したためと推察される。なぜならば本調査での自由記述欄には健康障害に生活の困難があることを初めて自覚したという感想が散見されるからである。一方、個人的要因の主効果に関しては、「関係」尺度の性別と援助経験に有意差が認められたが、「主張」尺度の関心度と援助経験及び「教育」尺度の性別と援助経験には有意差は認められなかった。これらの関係は共通因子でも見られているが、このうちの「関係」尺度と援助経験との関係は、共通因子と同様に、過去経験

より、現在経験の影響の方が有意に強くなっていた。これは、交流学习のような実体験で著しい成果を上げたとしても、過去のものとなつては意義が薄れてしまうことを示唆しているように思われる。従って、障害者との交流学习の効果には、このような限界のあることを、指導者は十分に理解しておくことが重要であろう。

次に、交互作用が有意な場合をみると、障害条件と関心度では「関係」尺度で、「関心なし強」と「関心なし弱」の категорияで抵抗感は、「聴覚」、「視覚」、「運動」、「健康」の順に弱くなっていたが、「関心あり強」の categoria では「運動」と「健康」との順序は逆になっていた。また、「教育」尺度の「関心なし強」と「関心なし弱」の categoria では「聴覚」と「視覚」及び「運動」と「健康」との間には賛成度に有意差は認められなかったが、「関心あり強」と「関心あり弱」では「運動」と「健康」との間には有意差が認められており、これら2障害条件と関心度には何らかの関係のあることが推察される。一方、「関係」尺度の障害条件では、関心度が増すにつれ、抵抗感は減少していた。また、「教育」尺度の視覚障害と聴覚障害でも「関心あり」の categoria が「関心なし」の categoria よりも賛成度が強いなど、障害者への抵抗感を軽減させるには、障害者への関心を高めることも有効であることが部分的に明らかとなった。しかし、「主張」尺度ではその効果は認められず、また他の2尺度でも健康障害などには関心度との関連が見られないことから、今後は関心を高めるだけでなく、その質についても検討することが重要であろう。一方、「関係」尺度に関し男女別の比較では、女子の方が男子よりも抵抗感有意に弱かった。これに対し、「主張」尺度では聴覚障害以外の障害条件で男女の間に有意差が認められたが、全て男子の方が抵抗感が弱かった。先行研究でも聴覚障害に関しては男女差は見出されておらず（河内, 2003 ; 河内・四日市, 1998）、男女学生に及ぼす障害条件の影響の違いが明らかとなった。従って、障害学生との交流に関する抵抗感を軽減させるプログラム作成に際しては、男女差と障害条件の関係についても考慮することが必要であろう。

以上、本研究の結果から障害の「共通性」は特定の対人場面（下位尺度）に依存していることが明らかとなった。このように、障害の「共通性」が示されたことは、障害条件が4障害条件に限定されてはいるものの、調査票による障害者に関する意識研究に貴重な情報を提供するだけでなく、個々の障害条件を考慮していない障害者心理学の理論的根拠ともなるであろう



(Jones, 1974)。ただし、障害の「特異性」の存在も示されていることを考えると、今後両者の役割をより明確にすることが、障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感を軽減させるためのプログラムを作成するのに不可欠な課題となるであろう。

### 引用文献

- Abroms, K.I., & Kodera, T.L. 1979 Acceptance hierarchy of handicaps : Validation of Kirk's statement, "Special education often begins where medicine stops". *Journal of Learning Disabilities*, **12**, 15-20.
- Cloerkes, G. 1979 *Einstellung und Verhalten gegenüber Körperbehinderten*. Eine Bestandsaufnahme der Ergebnisse internationaler Forschung. Berlin : Marhold.
- Fichten, C.S. 1988 Students with physical disabilities in higher education : Attitudes and beliefs that affect integration. In H.E. Yuker (Ed.), *Attitudes toward persons with disabilities*. New York : Springer Publishing Co. Pp.171-186.
- Fichten, C.S., & Bourdon, C.V. 1986 Social skill deficit or response inhibition : Interaction between disabled and non-disabled college students. *Journal of College Student Personnel*, **27**, 326-333.
- Fichten, C.S., Bourdon, C.V., Amsel, R., & Fox, L. 1987 Validation of the College Interaction Self-Efficacy Questionnaire : Students with and without disabilities. *Journal of College Student Personnel*, **28**, 449-458.
- 学生ボランティア活動についての調査プロジェクトチーム 1997 キャンパスにおけるボランティア活動ニーズ調査報告書 東京ボランティアセンター
- Gannon, P.M., & MacLean, D. 1995 Australian university students' attitudes towards disability : The first step to integrating students with a disability at university. *Australian Disability Review*, **1**, 63-71.
- Gannon, P.M., & MacLean, D. 1996 Attitudes toward disability and beliefs regarding support for a university student with quadriplegia. *International Journal of Rehabilitation Research*, **19**, 163-169.
- Garvar, A., & Schmelkin, L.P. 1989 A multidimensional scaling study of administrators' and teachers' perceptions of disabilities. *Journal of Special Education*, **22**, 463-478.
- Gething, L. 1991 Generality vs. specificity of attitudes towards people with disabilities. *British Journal of Medical Psychology*, **64**, 55-64.
- Gordon, E.D., Minnes, P.M., & Holden, R.R. 1990 The structure of attitudes toward persons with a disability, when specific disability and context are considered. *Rehabilitation Psychology*, **35**, 79-90.
- Harasymiw, S.J., Horne, M.D., & Lewis, S.C. 1976 A longitudinal study of disability group acceptance. *Rehabilitation Literature*, **37**, 98-102.
- 黄 誠遠・大野博之 1989 ボランティア活動参加が健常者の障害児・者に対する意識・態度に及ぼす影響 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), **34**, 241-253. (Huang, C.Y., & Ohno, H. 1989 The effect of participating in volunteer activities to attitudes of normal students toward the handicapped. *Research Bulletin (Educational Psychology Section), Faculty of Education, Kyushu University*, **34**, 241-253.)
- Jones, R.L. 1974 The hierarchical structure of attitudes toward the exceptional. *Exceptional Children*, **40**, 430-435.
- 河内清彦 1990a 学生および教師の視覚障害者観 文化書房博文社 (Kawauchi, K. 1990a *Attitudes of students and teachers toward persons with visual impairments*. Tokyo : Bunka Shobo Hakubunsha.)
- 河内清彦 1990b 肢体不自由者(児)に対する大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科および性別の役割について 特殊教育学研究, **28**(3), 25-35. (Kawauchi, K. 1990b The structure of college students' attitudes toward people with physical disabilities. *Japanese Journal of Special Education*, **28**(3), 25-35.)
- 河内清彦 1999 視覚障害学生を交流対象とした「キャンパス内交流自己効力尺度(CISES)」の作成 教育心理学研究, **47**, 471-479. (Kawauchi, K. 1999 Construction of the Campus Interaction Self-Efficacy Scale (CISES) for students with visual impairments. *Japanese Journal of*

- Educational Psychology*, **47**, 471-479.)
- 河内清彦 2001 視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造一性及び専攻学科との関連一 教育心理学研究, **49**, 81-90. (Kawauchi, K. 2001 College students' meaning structure of images of blind students and deaf students : Gender and major field. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 81-90.)
- 河内清彦 2002 視覚障害学生の学業支援サービスに対する大学生の意識構造一自己効力感, 視覚障害者観, ボランティアイメージおよび支援意欲との関連一 特殊教育学研究, **39**(4), 33-45. (Kawauchi, K. 2002 Sighted college students' attitudes toward academic supports for peers with visual impairments : Self-efficacy, attitudes toward blind persons, image of volunteering, and willingness to support. *Japanese Journal of Special Education*, **39**(4), 33-45.)
- 河内清彦 2003 「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度」の妥当性の検討一聴覚障害および視覚障害条件の影響について一 特殊教育学研究, **40**, 451-461. (Kawauchi, K. 2003 Validity and reliability of the General-Purpose Scale of Self-Efficacy Beliefs : interactions with students with hearing impairments or visual impairments. *Japanese Journal of Special Education*, **40**, 451-461.)
- 河内清彦・四日市章 1998 感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する健常学生の自己効力に関する研究 教育心理学研究, **46**, 106-114. (Kawauchi, K., & Yokkaichi, A. 1998 The self-efficacy expectations of non-disabled students about interactions with students with sensory impairments in college context. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 106-114.)
- 国立大学協会第3常置委員会 2001 国立大学における身体に障害を有する者への支援等に関する実態調査報告書 国立大学協会事務局
- 内閣府政府広報室 2002 障害者 月刊世論調査, **34**(5), 91-149.
- 中司利一 1988 日本と韓国における大学生による肢体不自由児に対するイメージ 特殊教育学研究, **25**(4), 29-42. (Nakatsukasa, T. 1988 College students' image of a motor-handicapped child in Japan and Korea. *Japanese Journal of Special Education*, **25**(4), 29-42.)
- 忍 博次 1967 身体障害者に対する偏見の研究一価値志向・受容度ステレオタイプに関して一 北星論集, **4**, 53-75.
- Schmelkin, L.P. 1984 Hierarchy of preferences toward disabled groups : A reanalysis. *Perceptual and Motor Skills*, **59**, 151-157.
- Siller, J., Ferguson, L.T., Vann, D.H., & Holland, B. 1967 *Structure of attitudes towards the physically disabled : Disability factor scales- amputation, blindness, cosmetic conditions*. New York : New York University, School of Education.
- 障害学生の高専教育国際会議実行委員会 1997 障害学生の高専教育一障害別・問題別の視点から一 多賀出版
- 田中 敏・山際勇一郎 1992 ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法一方法の理解から論文の書き方まで一 教育出版
- 谷合 侑 1995 進めよう視覚障害者の大学進学と職域拡大一そのQ&Aと資料集一 視覚障害者支援総合センター
- Thomas, A. 2000 Stability of Tringo's hierarchy of preference toward disability groups : 30 years later. *Psychological Reports*, **86**, 1155-1156.
- Westbrook, M.T., Adamson, B.J., & Westbrook, J.I. 1988 Health science students' images of disabled people. *Community Health Studies*, **12**, 304-313.
- Westbrook, M.T., Legge, V., & Pennay, M. 1993 Attitudes towards disabilities in a multicultural society. *Social Science and Medicine*, **36**, 615-623.
- 全国障害学生支援センター 2002 大学案内2002障害者版 全国障害学生支援センター

## 付 記

本論文の英文抄録をご校閲いただきました早川真一氏に深く感謝いたします。

本研究は日本学術振興会の平成15年度の科学研究費補助金(基盤研究(C)2, 課題番号15530616)を受けて行われた。

(2004.1.16 受稿, '04.9.2 受理)

## *University Students' Self-Efficacy Expectations and Attitudes Toward Interactions With Peers With Disabilities : Influence of Disabling Condition, Interpersonal Situation, and Personal Characteristics*

KIYOHiko KAWAUCHI (GRADUATE SCHOOL OF COMPREHENSIVE HUMAN SCIENCES, INSTITUTE OF DISABILITY SCIENCES, UNIVERSITY OF TSUKUBA)  
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2004, 52, 437 - 447

The present study explored the influence of disabling condition, interpersonal situation, and personal characteristics on self-efficacy expectations and attitudes regarding interactions with students with disabilities. University students without disabilities ( $N = 658$ ) completed 4 parallel versions of 4 subscales of self-efficacy expectations and attitudes. Each version specified a different disabling condition, blindness, deafness, use of a wheelchair, or health impairment, in the preamble to 4 subscales : friendship, self-assertiveness, integrated education, and embarrassing interaction. Factor analyses yielded 3 factors common to the 4 disabling conditions. The factors were named "Embarrassing Relationship," "Self-Assertiveness," and "Integrated Education." Analyses of the relationships of 3 personal characteristics (interest in persons with disabilities, gender, and volunteer experience) to the scores obtained from the 3 factors suggested that all 3 of those personal characteristics were related to the "Embarrassing Relationship" factor scores, and that gender was related to the "Self-Assertiveness" factor score. However, no personal characteristic was found to be related to the "Integrated Education" factor score. Further analysis using ANOVA revealed that personal characteristics significantly influenced the subscales of friendship and self-assertiveness, whereas no significant main effect emerged for the integrated education subscale.

Key Words : self-efficacy expectations, attitudes toward persons with disabilities, disabling conditions, personal characteristics, university students without disabilities